

函館盲学校・聾学校

130周年

共生社会実現への窓口

発信 地域から



函館

「少人数教育の中で娘の協調性や社会性が身につくか不安」。主婦の千葉綾乃さん(34)は函館聾学校の乳幼児相談室に3歳の娘・めいちゃんを通わせるが、娘の進路に頭を悩ませる。特別支援学校は少人数教育が特色だが、社会性の発達との両立が課題になる。

学びサポート

こうした声に応えようと、函館聾学校は2023年度、子供たちの学びをサポートするボランティアバンクを立ち上げた。当初は登録者が数人の組織だったが、教員らが市の手話講座や大学な



どで周知し、現在は76人に拡大。2時間のボランティア育成講座を受講すれば誰でも登録できる。講座で講師をつとめる橋谷利崇教頭は「ボランティア活動を通して聴覚障害に対する理解を深めてもらえれば」と話す。

昨年11月中旬に開かれた年に1度のバイキング給食では、20代から70代までのボランティア10人が同校の児童生徒や教員と一緒に食事を楽しんだ。渡島管内七飯町のリノゴや檜山管内厚沢部町のキャベツなど地元食材を使ったこだわり

のメニューが並び、小学部5年の田中心奏さん(11)は「人がたくさんいて少し緊張するけど、みんなと食べるのもっとおいしい」と手話で話す。

ボランティアにバイキング給食で函館盲学校の生徒や教員と交流するボランティアたち(奥)

金田淳撮影

は手話が得意な人も、全く使えない人もいて、教員の手話を介して子供たちと会話することができず、手話を勉強中だという函館市の介護士、橋本未来さん(41)は、「自分の思いをうまく伝えられず、ふさぎ込んでしまう子もいると思っていたけど、実際に会うとみんな手話を使いこなし、元気でキラキラしていた」と聴覚障害がある子供への見方が変わったと話す。

後援会員216人

130年の歴史を支えてきた函館盲聾教育後援会の存在も欠かせない。1992年(明治45年)、同校と函館盲学校の前身である函館盲啞院の後援会として発足。ボランティアバンクの補助のほか、子供たちの就学援助

か、子供たちの就学援助

や学校施設の充実、各種行事の引率教員の旅費を助成するなどしてきた。現在の会員は216人で、函館盲学校の和田悟教頭は「公立学校の後援会の規模としてはかなり大きい。子供たちの教育は地域の人に支えられている」と話す。

130年前、障害がある子供の教育を守ろうと設立された両校は、共生社会の実現に向けた道を歩んでいる。同会の島津彰会長は「元函館聾学校長は、両校のこれからの」と位置づける。「障害がある人との暮らし方や接し方をさらに発信できる学校になれば、地域全体が多様性を受け入れる社会へと進化していく」と期待を込める。

(函館報道部 白石翠)